

【作物】

1 品種・田植期別の穂肥施用時期 (出穂期・成熟期は目安)

品種名	田植期	穂肥(出穂20日前)		出穂期	成熟期
		NK特11号又はしあわせ化成	施用量(10a)		
きぬむすめ	6/1	7/26頃	30kg	8/15頃	9/22頃
	6/10	7/28頃	30kg	8/17頃	9/25頃
ヒノヒカリ	6/10	8/5頃	30kg	8/25頃	10/5頃
	6/20	8/8頃	30kg	8/28頃	10/10頃
にこまる	6/1	8/5頃	30kg	8/25頃	10/7頃
	6/10	8/9頃	30kg	8/29頃	10/12頃
松山三井	6/10	8/11頃	30kg	8/31頃	10/16頃
	6/20	8/15頃	30kg	9/4頃	10/21頃

・その他: 「あきみのりV550号」を使う場合は、出穂25日前に30kg/10a施用(穂肥がゆっくり効く)。

2 水管理について

- 中干し直後: 2~3回走り水を行った後に、間断灌水を行います。
- 幼穂形成期~穂ばらみ期: 土壌水分が不足すると収量や品質が低下するので、水分を十分保ちます。
- 出穂期~出穂期以降: 浅水管理(2~3cm)をします。異常高温が続く場合は、かけ流し灌水で地温を下げ、根傷みを防ぎます。
- 登熟期: 灌水して土壌に水分を与えたら、水は溜めずに、足跡に水がたまっている程度(飽水状態)にします。
- 落水期: 落水期は収穫前7日程度としますが、収穫作業に支障のない程度に刈り取り直前まで走り水灌水で土壌水分を保ちます。

3 病虫害防除について

防除時期	病虫害名	農薬名 濃度・使用量 使用時期
8月中~下旬(出穂期前)	いもち病・もみ枯細菌病・内穎褐変病・紋枯病・ウンカ類幼虫・ツマグロヨコバイ幼虫・ニカメイチュウ・イネツトムシ・コブノメイガ	アブロードロムダンモンカットエアー(750倍 収穫21日前まで) +ブラシンフロアブル(1,000倍 収穫7日前まで) (粉剤の場合: イッカツエース粉剤DL 3~4kg/10a、穂揃期まで)
8月下旬~(穂揃期~傾穂期)	カメムシ類(ウンカ類、ツマグロヨコバイにも有効)	スタークル顆粒水溶剤(2,000倍 収穫7日前まで)

- ・その他: コブノメイガが多発した場合は、パダンSG水溶剤1,500倍(収穫21日前まで)で防除。
- ・カメムシ対策: 出穂2週間程度前までに、畦畔・休耕田の草刈りを行って下さい。乳熟期から糊熟期が最も被害が大きく、この時期に当たる出穂10~15日後に防除を実施して下さい。

<真鍋>

【野菜】

1 サトイモ

- 水管理と追肥
梅雨明け以降乾燥害により葉焼け症状の圃場が見られます。主根は水分が多く太い軟弱根のため葉焼け症状が発生しやすく、この時期の葉焼け症状は収量に影響しますので主根を傷めないようこまめな栽培管理を行って下さい。
ア 全期マルチ栽培は全期間マルチで覆っているため、マルチ内の土壌水分を外から把握することが難しいので、晴天が続く場合畝間の土の状態や生育状況をよく観察して灌水します。灌水の目安は、3日に1回程度です。もしくは、テンシオメータを設置して土壌水分状態を把握して灌水します。
イ おおなか作業を行った化成体系のサトイモは、おおなか1ヶ月後を目安にしてしあわせ化成40kg/10aを目安に施用して下さい。
ウ 日中、溝に水が溜まったままの状態では、水の温度が上がり根傷みの原因となりますので、夕方の灌水に努め、日中には停滞水が残らないよう注意して下さい。
- 病虫害防除

害虫名	薬剤防除法		
	使用薬剤	散布濃度	時期/回数
ハダニ類	コテツフロアブル	2,000倍	収穫7日前/2回
ハスモンヨトウ	マトリックフロアブル	2,000倍	収穫7日前/3回
	ラービソフロアブル	750倍	収穫3日前/2回

2 ヤマノイモ

- 水管理と追肥
最終追肥は遅れないよう8月上旬に、MB粒状固形を80kg/10a施用します。最終追肥が遅れると、芋の形状の乱れが心配されるので注意して下さい。
開花後、栄養生長から生殖生長に移行し、吸肥力も7月下旬~9月にかけて最大となり、この時期に土壌水分を最も必要としますので、定期的な灌水により適湿を保つようにします。
- 病虫害防除

病虫害名	薬剤防除法		
	使用薬剤	散布濃度・量	使用時期/使用回数
コガネムシ類幼虫	バイジット粒剤	9kg/10a	収穫45日前/3回
ハダニ類	コロマイト乳剤	1,000倍	収穫7日前/2回
	マイトコーネフロアブル	1,000倍	収穫3日前/1回
ハスモンヨトウ	プレバソフロアブル	2,000倍	収穫前日/3回
シロイチモンジヨトウ	デルフィン顆粒水和剤	1,000倍	発生初期(ただし収穫前日)/4回
炭そ病	ペンコゼブ水和剤	600倍	収穫21日前/4回
	ダコニール1000	1,000倍	収穫30日前/6回

<越智>

【果樹】

1 摘果

- 樹ごとの着果量・新梢量に応じた摘果で、高品質生産と来年の着花確保を図ります。
- 温州みかん
着果量の多い樹から摘果を始めて、できるだけ下垂した果実を残します。着果量が少ない樹は、着果負担をかけて9月以降の仕上げ摘果、樹上選果で調整して下さい(後期摘果)。
樹冠上部を摘果した樹は、果梗部から発生した夏芽が来年の結果母枝になるので、エカキムシ等の防除をして下さい。
 - 中晩柑類
着果量の多い樹は、樹勢低下や肥大不良、来年の着花不足を招くので早急に摘果します。仕上げ摘果では、日焼け果や傷果等を摘除して8月中には終えて下さい。

2 灌水

- 土壌を極度に乾燥させると酸高や樹勢低下を招くので、適切な灌水が必要です。
温州みかんは、葉の巻き具合(葉の下垂や巻きが朝になっても戻らない)等を見ながら、7日間隔で10~20mm(10~20t/10a)を目安に灌水して下さい。
中晩柑は、土壌乾燥が続けば、7~10日間隔で20~30mm(20~30t/10a)を目安に灌水して下さい。

3 病虫害防除

- 黒点病防除は、前回散布後の累積降水量200~250mmまたは30日の間隔で定期的に薬剤散布して下さい。本病に弱い品種は散布間隔を短くします。また、伝染源となる枯れ枝は除去して下さい。
そのほか、ダニ類、カミキリムシなどの防除をします。極早生温州は、収穫前日数に注意して下さい。

<大西>

【花き・花木】

1 シキミ

- 病虫害防除
高温期で害虫が多発します。適期防除を徹底し、お彼岸出荷に備えて下さい。ダニにはコテツフロアブル2,000倍、アブラムシ・ハマキムシにはスプラサイド乳剤1,500倍、黒しみ斑点病にはトップジンM水和剤2,000倍を散布して下さい。



アオバハゴロモの幼虫



ハマキムシの被害と葉の中の幼虫



(2) 下枝の整理

- 株もとの古枝や細い下枝が込み合ってくると、病害が蔓延したり防除作業がやりにくくなったりします。また、収穫枝の伸張が悪くなるので、適宜切除して風通しを良くして下さい。

(3) 荷造り

- 採取した切り枝は、病害葉や古葉、実などを取り除きます。出荷先の規格に合わせて、輪ゴムや紐で元を揃えて束ね、日陰で10時間以上、水揚げをして下さい。

2 シンテッポウユリ

(1) 灌水

- この時期の極端な乾燥は、品質低下の要因(葉先焼け・草丈不足)となり、価格に大きく影響します。収穫期に入り、高温・干ばつが続く時は、日中に葉水を与えます。

(2) 追肥

- 葉色を保ち、光沢を出すため、出蕾後は福瀬太陽液肥(600倍、農薬混用可)を収穫始めに1回散布し、8月上旬に2回目を散布して下さい。

(3) 強風対策

- 強風被害対策のため、フラワーネットの支柱補強をするとともに、ユリの生育に応じて上げ、ユリをネットの枠内に入れ、倒伏を防止します。風で曲がった茎は半日以内であれば修正が可能なので、まっすぐに直します。

(4) 病害防除

- 葉枯れ病が多くなります。収穫期でも汚れの少ないフルピカフロアブル2,000倍を散布して下さい。

<日野>

【畜産】

- 猛暑(最高気温が35℃以上の日)と熱帯夜(最低気温が25℃を上回る夜)が続くと家畜の生産性が低下します。引き続いて暑熱対策には万全を期しましょう。その方法は「7月の重要農作業」を参照して下さい。

- 家畜だけでなく作業員も日中は熱中症を生じる恐れがあります。畜舎外での作業は早朝に変更し、こまめに休憩を取るなど作業時間に工夫を凝らしましょう。また汗を発散しやすい服装や水分の補給にも留意して下さい。

家畜名	家畜の快適温度(℃)	臨界温度(℃)
乳牛	10~15	27
肉牛	10~15	27
成豚	15~20	27
子豚	20~25	30
鶏	10~24	27

※臨界温度(家畜の生産機能に影響が及ぶ温度)

<中谷>